

大学生の就職活動を促進させる試み (1)

— 映像ビデオによる効果の検討 —¹

樋口匡貴

The effects of video-taped method on promoting college students' job hunting behaviors

Masataka Higuchi

大学生の就職活動意図に及ぼす映像ビデオの効果を検討することを目的として、17名の女子大学生を対象にした実験を行った。その結果、就職活動に成功した人物を紹介するビデオを視聴した学生は、一時的に進路選択に対する自己効力感を増加させることが示された。一方で就職活動に失敗した人物を紹介するビデオを視聴した学生は、ビデオ視聴直後に就職活動意図を増加させるが、ビデオ視聴の1~2ヶ月後には自己効力感を低下させることが示された。これらの結果から適切な就職支援にとってのこれらの映像ビデオの有効性が考察された。

キーワード：就職活動，進路選択に対する自己効力感，焦り，映像ビデオ

問題

大学生にとって卒業後の進路決定は非常に重要な課題である。数ある選択肢の中でも主要な進路は就職である(中島・無藤, 2007)。多くの学生は就職するために、いわゆる“就職活動”を行うことになるが、この就職活動にとって大きな役割を果たすのが進路選択に対する自己効力感である(たとえば Lent, Brown, & Hackett, 1994)。

進路選択に対する自己効力感とは、進路選択や適応の過程に必要な行動をうまく行えるという自信のことであり(Betz & Hackett, 1986)、進路選択の一連の過程に対して促進的な影響を及ぼすことが指摘されてきている。たとえば浦上(1996)は女子短期大学生を対象にした調査の結果、強い進路選択に対する自己効力感が積極的な就職活動を導いていることを明らかにしている。また安達(2001)は大学生を対象とした調査の結果、自己効力感は就業動機を媒介して進路探索意図を促進させ、加えて直接的に進路探索行動を促進させることを明らかにしている。

この自己効力感を増加させる試みに関しては、男性中心である職業分野で成功した女性の例を集めたビデオを見せることによって女性の自己効力感を高めることに成功した Foss & Slaney (1986) などがある。Foss & Slaney (1986) は、80名の女子大学生を対象に、伝統的に男性中心である職業

¹ 本研究のデータは、松山東雲女子大学の2005年度卒業生瀧口恵美さんより提供を受けた。記して感謝する。

分野で成功した女性の例を集めたビデオを視聴させた。従来男性中心である職業に対して女性は低い自己効力感を示すことが明らかにされていたが (Betz & Hackett, 1981), Foss & Slaney (1986) の作成したビデオを視聴した学生は、視聴した職業分野に対する高い自己効力感を示した。

しかしこれまでの研究では、自己効力感を高める試みが実際の進路選択行動に結び付いたのかどうかは検討が十分とはいえない。そこで本研究では、Foss & Slaney (1986) と同様に自己効力感を増加させることを意図した映像ビデオを用いて、そのビデオが自己効力感を増加させるのかどうか、そしてさらに進路選択行動意図を増加させるのかどうかを検討することを目的とした。また補助的な検討として、進路選択行動に影響を及ぼすと考えられる“焦り”に関しても、自己効力感と同様の検討を行った。

方法

実験参加者と実験計画

女子大学3年生17名(平均20.53歳)を対象とした、1要因等価3群事前事後測定計画による実験を実施した。操作した要因は実験参加者に提示したビデオの内容であり、自己効力感を増加させることを意図した成功例ビデオ、焦りを増加させることを意図した失敗例ビデオ、および無関連ビデオ(統制条件)の3水準であった。各群の人数は、成功例ビデオ条件では5名、失敗例ビデオ条件および統制条件では6名であった。

手続き

実験は2005年8月～9月に実施された。実験参加者は事前測定の後に無作為に3群に配置され、それぞれの条件に対応するビデオ映像を視聴させたのち、直後測定が行われた。さらに1～2ヶ月後に事後測定が行われた。なお実験は個別実験であった。

ビデオ材料

実験参加者に視聴させたビデオは約4分間のシナリオ朗読ビデオであった。シナリオの内容は「本大学の卒業生の愛子さんの現状と、彼女が大学3年生の頃の就職活動状況」を述べたものであった。シナリオの朗読はいずれの条件においても同一の人物(実験参加者と同年代の女性)が行った。シナリオの例として、成功例ビデオのシナリオをFigure 1に示した。

成功例ビデオ 就職活動に成功した卒業生の愛子さんについて、その後の順調な生活状況と在学中の就職ガイダンス等への参加状況を述べた内容から構成された。シナリオの文字数は712文字であった。

失敗例ビデオ 就職活動に失敗してフリーターとなっている愛子さんについて、その後の厳しい生活状況と在学中の就職ガイダンス等への不参加状況を述べた内容から構成された。シナリオの文字数は747文字であった。

無関連ビデオ 大学内のある機関について説明をする内容から構成された。シナリオの文字数は727文字であった。

卒業生の愛子さんという人についての話です。

第1志望に内定をもらい、卒業後その企業で働くことにしました。3年たって25歳になったとき、より自分に合った所への転職を望み、転職活動を始めました。面接の中で、3年間の経験を買われ自分の望む条件で転職できました。現在は新しい職場で充実した仕事を続けています。

月収は手取り25万円ほどで、家賃などに引かれても、月々10万ほどは貯金できます。生活にはかなり余裕があり、優雅な生活を送っています。

それでは、彼女の大学3年生のときはどうだったのでしょうか。

10月、就職ガイダンスに参加した。今後のことを見つめるいい機会になった。

11月、数学が苦手だったため、友人と一緒にSPI対策講座に参加してみた。

SPI対策講座に参加してみて、他の教科も勉強してみようと思い、就職問題集を買った。間違った問題などは特に何度も繰り返し解くようにした。

12月、就職ガイダンスに参加した。就職情報収集の仕方を教えてもらった。

また、実際に就職関連本を買い、読むことで、より就職について知ることが出来た。

1月、就職ガイダンスに参加する。合同説明会の日程などを教えてもらった。

2月、合同説明会に友人と一緒に参加してみる。いろいろなブースを回って、企業の人の話を聞くことが出来た。

また、就職ガイダンスに参加し、面接でのお辞儀の仕方など実際に教えてもらった。

さらに、友人同士で面接練習をしてみて、よくある質問などの答え方を実際にやってみた。

このような、愛さんがとってきた行動は、誰にでも出来るものです。

愛さんはこのような活動をしてきた結果、はじめにお伝えしたように、第1志望の企業に、無事内定をもらうことが出来たのです。

Figure 1 実験で使用したビデオ映像内のシナリオ例（成功例ビデオ）

測定尺度

各段階において測定した尺度は以下の3種類であった。いずれの尺度に関しても1因子構造を仮定し、得点が高くなるほど当該概念が大きくなることを意味するよう加算平均によって得点化した。これら3種類の尺度得点に対して正規性の検定を行ったところ、いずれの条件においても得点の正規性が確保されていることが確認された ($KS > .128, p > .05$)。

進路選択に対する自己効力感 浦上 (1995) による進路選択に対する自己効力感尺度を使用し、「全く自信がない」(1点)～「非常に自信がある」(4点)までの4段階で回答を求めた。全30項目での α 係数は、事前測定段階では $\alpha = .83$ 、直後で $\alpha = .86$ 、事後で $\alpha = .89$ と十分な値であった。

焦り 就職活動を実際に行っている女子大学生7名および心理学研究者1名の合議により、就職活動に対する焦りを測定できると考えられる25項目を設定した(項目例:「急がなければいけないと思う」、「このままではだめだと感じる」、「とにかく何かしなくてはと思う」、「私は大丈夫だと思う」(逆転))。「全くちがう」(1点)から「全くそうだ」(5点)までの5段階で回答を求めた。全

25項目での α 係数は、事前測定段階で $\alpha=.93$ 、直後で $\alpha=.92$ 、事後で $\alpha=.93$ と十分な値であった。

就職活動関連行動に関する行動意図 焦りと同様に就職活動を実際に行っている女子大学生7名および心理学研究者1名の合議により、様々な就職活動関連行動20項目を設定した(項目例:“履歴書の用紙を買う”,“セミナーに参加する”,“企業に資料請求をする”)。「行うつもりはない」(1点)から「行うつもりである」(5点)の5段階で回答を求めた。全20項目での α 係数は、事前測定段階で $\alpha=.91$ 、直後で $\alpha=.92$ 、事後で $\alpha=.96$ と十分な値であった。

結果

事前・直後・事後の3段階における3種類の尺度得点に関して、条件別に平均値および標準偏差を算出した(Table 1)。これらの得点に対して、3種類の尺度得点別に、事前得点から直後および事後得点への変化量を従属変数、事前得点を共変量とした3(視聴ビデオ)×2(時期)の共分散分析を行った。さらにビデオの効果をより詳細に検討するための補助的な分析として、3種類の尺度得点別に事前得点から直後及び事後得点への変化量を算出し、視聴ビデオ毎に時期による比較を行った(Boferroni法)。

進路選択に対する自己効力感

進路選択に対する自己効力感得点に対する3×2の共分散分析の結果、視聴ビデオの主効果($F(2, 13)=1.46$)および時期の主効果($F(1, 13)=0.48$)はいずれも有意ではなかった。しかしながら1次の交互作用効果($F(2, 13)=2.47, p<.10$)が有意傾向となった。下位検定の結果、成功例ビデオ条件における時期の単純主効果($F(1, 13)=3.95, p<.05$)および失敗例ビデオ条件における時期の単純主効果($F(1, 13)=8.35, p<.01$)が有意となり、いずれの条件においても事後よりも直後の場合に、自己効力感が高く変化したという結果であった。

補助的な分析の結果も同様であり、成功例ビデオ条件においては事後よりも直後の方が($\alpha=.10$)、失敗例ビデオ条件においても事後より直後の方が($\alpha=.05$)、自己効力感の得点が高く変化したことが示された。

焦り

焦り得点に対する3×2の共分散分析の結果、視聴ビデオの主効果($F(2, 13)=1.06$)、時期の主効果($F(1, 13)=0.15$)、交互作用効果($F(2, 13)=0.36$)のいずれも有意とはならなかった。

補助的な分析の結果も同様であり、いずれのビデオを視聴した場合にも焦りの有意な変化は見られなかった。

就職活動関連行動に関する行動意図

就職活動関連行動に関する行動意図得点に対する3×2の共分散分析の結果、視聴ビデオの主効果($F(2, 13)=1.18$)および交互作用効果($F(2, 13)=0.43$)は有意ではなかった。しかしながら時期の主効果($F(1, 13)=8.47, p<.01$)が有意であり、直後においてよりも事後においての方が、行動意図

得点が下がるという結果であった。

補助的な分析を行った結果、失敗例ビデオ条件においては、ビデオ視聴直後の方が1~2ヶ月後よりも5%水準で有意に得点が高いという結果が得られたが、成功例ビデオ条件においては、統計的に有意な差は見られなかった。

Table 1 各条件における得点の平均値 (標準偏差)

従属変数	視聴ビデオ	事前	直後	事後
自己効力感	成功例ビデオ	2.87 (0.44)	3.08 (0.44)	2.88 (0.48)
	失敗例ビデオ	2.83 (0.32)	2.88 (0.30)	2.62 (0.32)
	無関連ビデオ	2.81 (0.17)	2.88 (0.24)	2.89 (0.21)
焦り	成功例ビデオ	2.70 (0.59)	2.65 (0.64)	2.71 (0.50)
	失敗例ビデオ	2.85 (0.99)	2.96 (0.93)	2.89 (0.73)
	無関連ビデオ	2.94 (0.64)	2.74 (0.48)	2.90 (0.89)
行動意図	成功例ビデオ	3.89 (0.74)	4.04 (0.66)	3.91 (0.98)
	失敗例ビデオ	3.83 (0.61)	4.44 (0.35)	4.05 (0.80)
	無関連ビデオ	3.78 (0.82)	4.03 (0.87)	3.73 (1.12)

考察

本研究では、進路選択に対する自己効力感を増加させることを意図した映像ビデオを用いて、そのビデオが自己効力感を増加させるのかどうか、そしてさらに進路選択行動意図を増加させるのかどうかを検討することを目的とした。さらに、自己効力感と同様に、進路選択行動に影響を及ぼすと考えられる“焦り”についても検討を行った。映像ビデオとしては就職活動に成功した人物を紹介するビデオ（成功例ビデオ）と失敗した人物を紹介するビデオ（失敗例ビデオ）、さらに無関連ビデオを使用した。成功例ビデオおよび失敗例ビデオに関して、その有効性を考察する。

まず成功例ビデオに関してであるが、視聴直後に自己効力感を増加させることが示された。この結果は、成功した人物例を視聴することによってその領域での自己効力感が増加することを示した Foss & Slaney (1986) の結果と一致するものである。しかしながら本研究で得られた成功例ビデオによる自己効力感増加効果は、1~2か月経過後に消失することも示された。さらに成功例ビデオの視聴は、就職活動行動意図を増加させるという結果は得られなかった。また焦りに関しても成功例ビデオによって変化は見られなかった。進路選択に関する自己効力感は、進路選択に関わる様々な過程に促進的に働くことが指摘されてきている（たとえば安達, 2001）ことから、今後はビデオ視聴によって一時的に増加させた自己効力感を高い水準のまま保持させ、それを行動意図さらには行動に結び付けるための方策を考えていく必要があるだろう。

次に失敗例ビデオに関してであるが、失敗例ビデオは直後には自己効力感に影響を与えないものの、事後的に自己効力感を減少させることが示された。また焦りに関しては、失敗例ビデオは影響を及ぼすという結果は得られなかった。その一方で失敗例ビデオは、視聴直後に就職活動行動意図

を増加させることが示された。自己効力感の減少は就職活動行動意図に対してネガティブな影響を及ぼすものと推測され（たとえば安達, 2001）、失敗例ビデオ条件では、視聴直後に自己効力感・焦りともに変化が見られなかったことから、このビデオは自己効力感や焦りを媒介せずに一時的に就職活動行動意図を高める可能性も考えられるだろう。

最後に今後の課題について言及する。本研究では、実験参加者がいずれの条件においても非常に少なかった。得点の正規性は確認されたものの、参加者による結果の偏りが否定できない。今後の課題の第1は、参加者を増やすことによる再検討が挙げられるだろう。さらに第2の課題として、大学生の就職活動をより適切に支援するためのプログラム作成が挙げられるだろう。本研究の結果から、映像を用いたビデオには一定の効果があることが示された。今後はそれぞれのビデオ内容を修正し、より大学生の就職活動支援にとって適切なものへとしていく一方で、複数のビデオの組み合わせによる効果なども検討していく必要があるだろう。

引用文献

- 安達智子 (2001). 大学生の進路発達過程 — 社会・認知的進路理論からの検討 教育心理学研究, 49, 326-336.
- Betz, N. E., & Hackett, G. (1981). The relationship to career-related self-efficacy expectations to perceived career option in college women and men. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 399-410.
- Betz, N. E., & Hackett, G. (1986). Applications of self-efficacy theory to understanding career choice behavior. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 4, 279-289.
- Foss, C. J., & Slaney, R. B. (1986). Increasing nontraditional career choices in women: Relation of attitudes toward women and responses to a career intervention. *Journal of Vocational Behavior*, 28, 191-202.
- Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. (1994). Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance. *Journal of Vocational Behavior*, 45, 79-122.
- 中島由佳・無藤 隆 (2007). 女子学生における目標達成プロセスとしての就職活動: コントロール方略を媒介としたキャリア志向と就職達成の関係 教育心理学研究, 55, 403-413.
- 浦上正則 (1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 42, 115-126.
- 浦上正則 (1996). 女子短大生の職業選択過程についての研究 — 進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から — 教育心理学研究, 44, 195-203.